

冷泉家の年間行事

——ホツマツタエとの関連で——

横澤 利昌

(事業承継学会代表理事／ハリウッド大学院大学特任教授)

はじめに

2016年、事業承継学会・京都研究会で冷泉為人氏をゲストとしてお招きしたことがある。なぜ和歌の家が800年以上も継承され存続するのか。そこで行われる我が国の「年中行事」が、なぜ絶えることなく続くのか。年中行事は中国から伝来されたものと了解していたが我が国固有の行事が中国とミックスされ行われていたことが冷泉家の年中行事から明らかになった。小論では、記紀の原点でもある「ホツマツタエ」との関係に触れながら論述する。

冷泉家に見る日本の伝統——京都の特色から

京都といえば古都である。奈良とともにある日本人のこころのよりどころである。その歴史は、政治史や文化史などいろいろな角度からとらえることができる。ここでは、文化に焦点をしぼり、なかでも冷泉家に注目して、京都の特徴を浮上させてみることにしよう。

I 和歌と冷泉家の問題

1. 和歌の家としての冷泉家

京都、そしてその文化的な一象徴としての冷泉家には、神と尊崇され伝承された和歌の典籍の承継があることに注意しなければならない。ここで、どうして冷泉家は今日まで800年余も続いて来たかの主たる理由を考えてみよう。それは、まず、日本文化を代表する典籍類を「神」と尊崇し代々に亘って守り伝えて来たことであり、次に、冷泉家は、いわゆる「一流の二流」であり、明治維新にも京都に残り東京に遷らなかつたため、関

東大震災と東京大空襲を免れたこと、さらに、冷泉流の「型の文化」を基本形として、一子相伝、かつ口伝でその奥義を継承しつつ、その型を常に昇華し続けたことがあげられるであろう。

なお、冷泉家に存在する和歌集等は、国宝等、以下のとおりである。

〈国宝〉

古今和歌集（藤原定家筆）1帖 附：後土御門天皇宸翰消息・後柏原天皇宸翰詠草・後奈良天皇宸翰消息1巻 嘉禄2年（1226年）書写。

後撰和歌集（藤原定家筆）1帖 天福2年（1234年）書写。

拾遺愚草（藤原定家自筆本）3帖 附：草稿断簡1幅

定家の自撰歌集。中世以前の歌人の自撰・自筆の歌集としては日本で唯一のものである。

古来風躰抄（藤原俊成自筆本）2帖

明月記（藤原定家自筆本）58巻1幅 附：補写本1巻、旧表紙（10枚）1巻

〈重要文化財（典籍）〉

一 和歌集

時明集（ときあきらしゅう）1帖－平安時代の人物、讃岐守時明が女房らと詠み交した歌を集めたもの。平安時代の写本。

後拾遺和歌抄 1帖－鎌倉時代

続後撰和歌集 上下（藤原為家筆）建長七年書写奥書（1255年）1帖

周防内侍集（藤原俊成筆）1帖

貫之集（巻五残巻、巻第八）村雲切本 1巻－平安時代

仲文集（藤原定家筆）1帖－三十六歌仙の1人藤原仲文の家集（個人歌集）の写本。

恵慶集 上（えぎょうしゅう）（藤原定家筆）1帖－平安時代の歌僧・恵慶の家集の写本。

散木奇歌集（巻頭と奥書のみ藤原定家筆）安貞二年書写奥書（1228年）1帖－平安時代の歌人源俊頼の家集の写本。

残集 1帖－西行の歌集の鎌倉時代の写本。

新古今和歌集（自巻第一至巻第十五）3冊－鎌倉時代、文永11年（1274年）－文永12年（1275年）の筆写。

素性集（色紙）1帖－素性の家集の平安時代末期の写本で、色変わりの装飾料紙に書かれている。

新古今和歌集（隠岐本）上 1帖－鎌倉時代の写本。

万葉集 巻第十八（金沢文庫本）1帖

二 歌書類

正中二年七夕御会和歌懐紙（12通）1帖－鎌倉時代（1325年）

元徳二年七夕御会和歌懐紙（24通）1帖－鎌倉時代（1330年）

和歌初学抄（藤原為家筆）1帖

集目録（藤原定家筆）1巻－定家が自ら筆写または校訂した歌集の自筆目録。

寛平御時后宮歌合（かんびょうのおおとききさいのみやのうたあわせ）（藤原定家・為家

筆）1巻

五代簡要（万葉集等詞抜書）承元三年藤原定家撰述奥書（1209年）1帖－万葉集、古今和歌集などの歌の句を抜書きしたもの。藤原定家編。鎌倉時代の書写。

嘉元百首 2巻

文保百首 21巻

永徳百首 12巻

袖中抄 12巻 内2巻正安二年（1300年）僧祐尊書写奥書（附 袖中抄4冊）

俊頼髓脳 1帖 平安時代の歌人源俊頼の歌学書の鎌倉時代の写本。

2. 藤原道長・藤原定家そして冷泉家 25代の系図

冷泉家は、その家系図によれば、権勢を誇った藤原道長の子長家（ながいえ）から数えれば、ほぼ1000年、31代続いた、まさに「歌の家」である。また、冷泉家が祖と仰ぐ藤原俊成・定家の親子からは800年となる。そして定家の子為家、為家の子為相（ためすけ）が冷泉家を興してからは「25代730年」である。

なお、冷泉家になる前の長家から為家までの六代は「御子左家（みこひだりけ）」といわれており、とりわけ俊成、定家、為家の三人は勅撰和歌集の撰者であった。為家のあと御子左家は二条家と京極家と冷泉家の三家に分立したが、前の二つの家は南北朝時代に絶家したので、俊成、定家、為家の正当を継ぐのは冷泉家になる。また、冷泉はいわゆる姓でなく（姓は藤原氏）、同家があった通りの名前から来たいわば屋号である。この屋号の継承という点に日本のおおいなる伝統を垣間見ることができよう。

3. 和歌の冷泉家を創った阿仏尼

冷泉家にとって初代為相の母である阿仏尼の果たした役割は極めて大きい。すなわち、定家の息

子の為家は、父親と同じく高名な歌人であったが、年老いてから阿仏尼との間に為相が生まれた。しかし、先妻との間の長男、次男とは大きな年齢差があったので行く末を心配した為家は、莊園や、定家が残したさまざまな古典籍を長男でなく為相に譲るとの「譲状」を遺言して亡くなったのであった。その結果引き起った長男との相続争いを解決するために、鎌倉幕府への嘆願の旅に出たが、その紀行文と鎌倉滞在の様子を記したのが有名な「十六夜日記」なのである。

百人一首にも詠われている逢坂の関で「さだめなき命は知らぬ旅なれど又あふ坂とたのめてぞ行く」との歌を残して決死の覚悟の旅立ちであったが、訴訟の解決を見ぬまま鎌倉で客死したのであった。しかるに、亡くなってから30余年も経過した末の勝訴により、為相が継承した俊成・定家から伝えられた古典籍類は、今も冷泉家に伝えられていることになるのである。

II 和歌の本質

1. 歌道の家元、冷泉家の権威の源：俊成と定家

和歌の道は有心論である。こころのつながりとつたえである。これについて、定家は、父俊成の幽玄の歌論を発展させ、余情妖艶を唱えて有心論（対象に虚心対してその境に没入してよく本質を観じる作風態度）に到達したのである。後世には、歌道の師と仰がれたのもこの有心の立場によるものといえよう。たとえば、千利休の師は定家の新古今和歌集の名歌「見渡せば花ももみじもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」を茶の湯の理念「わび」と「さび」の代表歌であるとしている。

2. 日本の古典の後世への継承

定家は、朝廷にあっては九条家の家司（けいし）となり、その保護を受けたが九条家の失脚に

ともない作歌のみならず書写に励み、古今和歌集、源氏物語、土佐日記など日本の数ある古典が後世に継承されることになった。さらに自身の日記全60巻の「明月記」により和歌・歌学のみならず公家と武家の間の出来事、当時の世の中のあるゆることを知る事が出来る。その中の「紅旗（朝廷の旗を掲げての）征戎は吾が事にあらず」、すなわち、権力争いにまきこまれず文学に専心するべしとの言葉が、冷泉家に家訓として受け継がれているのであって、ここにも永続の精神を垣間見ることができよう。

3. 和歌と短歌の相違

和歌は五・七・五・七・七のリズムをもった叙情詩であるが、和歌と短歌の違いはどこにあるのか。一例をあげると「梅にうぐいす」は和歌のきまり言葉になっている。実際は梅に「めじろ」の光景の方が多くにもかかわらず、梅にうぐいすと詠むのが和歌の伝統である。この日本語の型、そしてその型の組合せ、取り合わせで詠むのが日本の和歌の伝統である。蕪村の絵画に「新緑杜鵑（ほととぎす）図」がある。童謡に「卯の花のにおう垣根にほととぎす早も来啼きて」とあるが、卯月四月の卯の花では余りにもあからさまなので「新緑」に変えたのではないか。江戸時代はこのような「みたて」、「もじり」が盛んに行われていた。とくに古典を踏まえてそこから新しい「型」を生み出した例が多々見られたのである。

III 冷泉家の年中行事とその背景

1. 公家住宅で行われる無形の文化財、年中行事と歌会とその本質

正月一日は心身を清め正装してお文庫に御参りする。二日には和歌を詠み、書き初めをしてそれを古式にならいお供えし、七日は七草粥、十五日

には小豆粥と門松などのとんど焼きを行ったあと、平安装束に身を包んだ門人による公の行事、「歌会始」がある。

春から夏にかけては、二月に節分、三月にはお雛祭り、男雛と女雛の並び方が一般とは「逆」であるが、桃を司る大きな「西王母」も飾られ、五月は大将人形を飾る端午の節句、六月の夏越（なごし）の祓い、七月には冷泉家にとって歌会始と同じ位重要な「乞巧奠（きっこうでん）」、すなわち七夕のお祭りがあり、雅楽で始まり暗くなってから歌をお供えし、最後に天の川に見立てた白い布をはさんで男女が歌のやりとりを行う。

なお、冷泉家の雛祭りで欠かせないのが、西王母の存在である。雛壇の右端の大きな人形である。この西王母は、お土産に「桃」を持ち帰ったとされ、いわゆる桃源郷の起源はここにあるという。七夕に関しては、乞巧奠は中国から来たが、それ以前に、日本では七夕を祭る行事がり、歌を椽の葉に書いたとされる。こうした面に、『ホツマツタエ』の慣わしが生きているのである。



椽の葉をつるす
出典「冷泉家の年中行事」78頁

なおまた、歌というとき、日本にはなぜ万葉集があるのだろうか、という素朴な疑問が生ずる。それも身分に差別がなく、詩歌で求婚し、詩歌で

子供がアマカミ（天皇）の危険をしらせ、詩歌で教育した。ヤマトでは詩歌は身分に差はなく物事の基準であった。



ひな祭りに西王母が飾られる¹⁾²⁾
出典「冷泉家の年中行事」55頁

天皇から旅人までの詠歌が編まれている。そして多くの場合、佳い詠み手は出世している。このことは、ホツマツタエにあるように、アウタ（天地の詩）で教育したことを暗示しているのである。すなわち、詩歌で知らせ、問い、気持ちを伝え、その答えも、詩歌で応答したのである。ホツマツタエでそれがわかるし、下って現代においても、日本では、国民が和歌・短歌を理解し合っている。

この意味で、冷泉家の発展は、ホツマツタエの実践・伝承であったともいえるのではないだろうか。

2. 無形文化財としての京都

冷泉家は有形文化財だけでなく、無形文化財も承継していることを忘れてはならない。しかし、たとえ京都の人でも、各年中行事のいわれについて尋ねられたときには「昔からそうしているから」と答えざるをえない場合が多々あるという。実は、そこにこそ、古式伝来の精髓があるといえ

よう。たとえば、今でも、節分には、「男の子が豆まきをしてくれる今日は嬉しい日である」との意の歌を詠み渡され、その返歌を求められることさえあるのである。

なお、和歌は型の文化であり、題がありその題に沿い自然の花鳥を歌に詠むことが基本となっている。一方短歌は人とは違う自分の気持を歌にしたものであり、その人の思いを表現する日記であり私小説のようなものである。ともに、一種の無形文化財である。

歌会始めでは目出度い正月であるので、正月の題に沿ったものでなくてはならない。和歌には春夏秋冬、恋と憎の歌の部立てがあるが、短歌も季節を重視しており、俳句の季語と同様である。なお、諸行事は基本的には旧暦で行うが、正月の諸行事は新暦で行うなど、割合に融通無碍である。

また、冷泉家の公家住宅で行っている家業とは何か、又他の元公家の人達は家業をどうしているのかというと、家業は年中行事と歌会を守ることが主体となっている。江戸時代の初めに禁中並公家諸法度により、公家は家業に専心せよと言われたことが続いているのである。他の公家はほとんどが現代生活を行っているのである。

また、冷泉家と東福寺との縁はどうして出来たのかというと、俊成の娘か姪が、南門の四カ寺の塔頭がある土地を寄進した縁である。東福寺は九条家が後ろ盾にあり、定家も九条家に家司（けいし）として出仕していた関係もある。冷泉家の当主が亡くなった時にはその四カ寺が御参りに来てくれ、俊成の回忌法要は同寺の法堂で行われるのである。

さらに、伝統の日本の文化の体現としての冷泉家が、現在日本の欧米一辺倒の考え方についてどう考えているかということ、たとえば、フランスは農業国として農業文化も大切にし、最先端の技術も発達させるという両義性の叡智が働いている

が、日本は同国に比べれば劣っているのではないかとみている。また、力は正義であるとの米国の考え方は問題であるとする。

3. 京都の特色：伝統と革新の融合

①舞台芸術

まず、能楽についてみよう。室町時代に成立したといわれる能楽は、今日まで約700年にわたって伝承されてきた、日本を代表する舞台芸術である。2008年にユネスコの世界無形文化遺産にも登録され、海外でも高く評価されている。「能」は、謡（コーラス）と舞で構成された和製ミュージカル、「狂言」はセリフとしぐさを中心としたコミカルな対話劇、ともいえる。能と狂言を合わせて、「能楽」と呼ぶ。

②日本舞踊と花街の文化

日本舞踊とは、日本の伝統的な踊りの総称。和楽器や唄などの音楽に合わせて「振り」とよばれるしぐさを組み合わせて演じられる。舞や踊りをはじめ芸事の練習を積み重ね、京都の伝統文化を大切に守り育てているのが、芸妓（げいこ）や舞妓（まいこ）といった担い手である。現在の京都には、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街（かがい）があり、総称して五花街と呼ばれている（昔は、島原を加えて六花街と呼ばれていた。）。五花街それぞれが毎年、舞踊公演を行っている。

③文化の伝統と革新の融合

京都では、長い歴史の中で受け継がれてきた文化や「こころ」を今に伝える伝統芸能はもちろん、その豊富な文化芸術資源をいかした、現代的な作品づくり、伝統と革新が融合した新たな作品づくりも盛んである。京都の文化は伝統と革新の融合であり、かつ実験的な「創造する文化」であ

る。

④伝統工芸の存在

千年以上にわたり日本の首都であった京都には、全国からヒトやモノが集まり、独特の文化を発展させてきた。能、狂言をはじめとするユニークな舞台芸術や茶道、華道などの生活文化を支えてきたのが、京都の伝統工芸である。こうした伝統工芸の多種多様な製品は、ライフスタイルのあらゆる場面に溶け込み、豊かな生活文化をはぐくみ、新たな産業を発展させて来ている。さらに、その精緻な技や知恵は、最新のテクノロジーと結びつき、京都から世界を代表するリーディングカンパニーが続々生まれている。

⑤茶道・華道・書道

江戸の中後期頃からは、庶民のたしなみ・お稽古事としても一般に広まっていった茶道・華道・書道。それらは、海外から伝わった後、京都で栄え、今も盛んに実践されている。茶道は「人をもてなす事の本質とは」といった問いをもって客人を接待するもので、茶事として進行する時間そのものが総合芸術である。華道は、植物を主体に、様々な材料を組み合わせて造形を生み出し、書道は、文字や言葉の美しさを表そうとする造形芸術である。総じて、京都は芸道の街であるといえよう。

⑥京の食文化

寒暖差が大きく、四季の移ろいが鮮やかな京都。良質の水と土に恵まれ、新鮮な野菜はもちろん、琵琶湖と近海に加えて遠く北海からも水産物が届き、豊かな食文化が発達した。千余年の都であった京都では、長い歴史の中で培われた行事やしきたり、茶の湯や生け花などの「くらしの文化」が、季節感やおもてなしの心、本物へのこだ

わりとして、食文化に影響を与えている。季節感を楽しみ、五感で味わうことを尊ぶのが京の食文化である。

⑦お祭り・郷土芸能

いわゆる西洋文化が入ってくる以前から各地の地域（共同体）にて行われている神楽・人形芝居・祭囃子・舞踊などの各種芸能は、地域住民により、主に口伝で伝承されている。地域ごとに独自性があり、主に地元の祭礼や儀式などで奉納されてきた郷土芸能がある。たとえば、まず、からす田楽（京都府無形民俗文化財）は、南丹市美山町の大原神社の摂社川上神社にて笛や太鼓、ピンササラをもった「九人衆」によって五穀豊穡や山の無事故を願い、奉納されるものである。また、元伊勢籠神社 葵祭は、「御生れ神事」といわれるご祭神の再誕が祭の要であり、それを祝福する「太刀振り」（京都府無形文化財）や「神楽」の数々が大きな見どころである。さらに、和知人形浄瑠璃がある。

Ⅳ 冷泉為人氏による京都の特色

こうして見てくると、京都の文化的な特色は、現代に生きる古き日本の文化の伝承と承継の象徴ともいえるのではないだろうか。なお、京都の文化の特質については、冷泉家の冷泉為人氏による16項目に凝集された整理がある。最後に、その考察を紹介してみよう。

1. 温故知新の宝庫
2. 日本の歴史と文化の蓄積
3. 日本の伝統文化の継承：『古今和歌集』、『新古今和歌集』など。
4. 革新的な伝統文化：「古典」⇔「現代」, 「伝統」⇔「革新」, 「不易」⇔「流行」の闘ぎ合いと競い合い。

5. 多様な文化の混在：多様なものを多様なものとして認める，年中行事，祭，三大祭，分業。
6. 豊かな食文化
7. ちょっとした心配りが生み出すスムーズな人間関係とコミュニケーション：「限りなくおしはかる（推量）」
8. 「餅屋は餅屋」を認める：専門の技術を高く評価し，それを認める。一つのことを認める。一つのものに特化する。そして一流のものを求める。
9. 距離感を大事にする人づきあいの妙味
10. 「一見さんお断り」：京都のイケズ。おカネよりも信用（信頼）を重んじ絆を重視する。「権力」よりも「権威」を認め，「継続」，「歴史」を重んじている。
11. 外部からの「人」や「もの」を受入れ，それを生かす伝統：日本人は受容型の民族。
12. 宗教の本山や芸能の家元などが多い。
13. 京都の伝統技術，ハイテク産業，ベンチャー企業
 - ①京都の起業家は確固たる自らの経営哲学（理念）を持っている。
 - ②時の体制に屈せず，自由な発想で新たな製品や経営手法を生み出す。
 - ③信念の実現にひたすら努力する。
 - ④外部からの「人」や「もの」を生かす伝統がある。
 - ⑤時流に迎合しない：「古都の誇り」と「画一的な規範」を押し付けない，あいまい性を持ち合わせている。
14. 京都は祭りが多い：例，京の三大祭，葵祭，祇園祭，時代祭。
15. 京都は学生の町である：若者の町，若い，新しいエネルギーを吸収していつも生活しよう

としている。

16. 京都は，約400年，権力（行政）の中心から距離があった：このことは，京都独特の文化を育む素地があったことになる。いわば，中央と地方，都と鄙。

以上が冷泉為人氏による京都の特色についての考察である。これを俯瞰するとき，京都の

特色は，そのまま日本古来の民族的な特色であるといえよう。それはまた，ホツマツタエの精髓の実践であったとみることができる。

おわりに

ホツマツタエは，古事記・日本書紀との3書を比較してみると記紀より前にできた文字であることがその和歌の意味や5・7調から判る。

全40アヤ（章をアヤという）の第1アヤが和歌で始まる。全体が5・7調の叙事詩である。

1アヤだけではないが枕詞，掛けコトバ，隠しコトバ，回り歌などの説明がある。記紀には説明もないし訳しきれていない。

年中行事の由来は「常ナスコトニ アメヲ知ルナリ」＝年中行事は天（アメ）の営みを知ることである，とホツマツタエにある。

七夕のように天の川で牽牛と彦星が会おうというのは，中国からの伝説であるが，日本では梶の葉に願いをかいて竹に吊るすという行事は日本（ホツマでは既にヤマトと記されている）固有のものである。³⁾⁴⁾

1月・歳徳神（トシノリノカミ），2月・初午のお稲荷さん，3月・桃の節句，4月・サビラキと葵祭り，5月・端午の節句，6月・大祓と茅の輪，7月・七夕（ホシマツリ）とお盆，8月・八朔（はっさく）と風祭，9月・菊祭り，10月・神無月（本当に神のいない月か），11月・師走の意味

等は日本固有のものであった。地域によって独自性があり、日本では、現在も行われている。

冷泉家のひな祭りで飾られる、道教の祖といわれる「西王母」（ホツマではウケステメという）は、能にも登場する。能は人間だけでなく、動物・植物などが主役として登場する。西欧哲学の人間中心に対して、日本は能・狂言にも植物・動物など自然が主役になり人間と一体になっている。

冷泉家やホツマツタエと対話しながら思うことは、伝統とは過去の再現であるとともに現在の創造である、といえよう。老舗も同様である。

（亜細亜大学名誉教授）

参考文献

- 1) 冷泉貴実子・(1987)「冷泉家の年中行事」中川邦昭（写真）、朝日新聞社発行
写真集であるが西王母がひな祭りに欠かせない重要な飾りであることが分かる。
- 2) 高島三良（1994）「山海経—中国古代の神話世界—」平凡社　ここに西王母が詳しく説明されている。
- 3) 松本善之助（1993）「ホツマ日本人の知恵」淡声社
- 4) 松本善之助監修・池田満編（1999）「校注ミカサフミ・フトマニ」96頁　展望社